

紙芝居の変化と生産構造の変容

Conflicts between Continuity and Displacement in Japanese Kamishibai

姜 竣

- ①素材と問い
- ②立絵から平絵へ
- ③鏡の紙芝居
- ④タクヅケとウラガキ
- ⑤絵と声、絵と文字
結びに代えて

【論文要旨】

これまで筆者は、紙芝居という素材を民俗学の研究対象にする上で、いくつかの困難にぶつかってきた。それは、紙芝居が風俗であって民俗ではないとか、定本柳田集の索引にその項目はあるかとかいうような難儀をぶつけられたことである。理由は、紙芝居という実践が変化しやすく、いわゆる民俗社会とは馴染みのうすい領域だからだろう。民俗学が変化という事象を捉えられないのは、歴史の同一性（伝承）の把握を学の使命としてきたからであり、また、柳田の分類を再生産（記述）するなかで民俗という事象は実体視されてきた。しかし、柳田がトラディションの訳語を伝統ではなく伝承としたのは、対象の変化しつつ構造化する側面を重視するための工夫であった。

本論文は、明治30～昭和10年代の紙芝居における実践が、変化しつつ構造化するあり方を問題にする。絵話（平絵）の出現による紙人形芝居（立絵）の後退は、従来の生産における製作と使用の未分化な形態や徒弟制が解体する過程と並行して行われた。そこで、鏡を用いた紙芝居のような変形も見られる。そして、平絵の生産における文字（ウラガキ）の介入が、製作者と熟練の説明者（タクヅケ係り）の間に軋轢を生じさせていた。それは画面構成に対する、上演時の音声言語と製作時の文字との矛盾に由来するものであった。

以上の記述と議論を通じて、筆者は媒体の変化を組織的分化という観点から捉える。または、組織論的な矛盾が媒体の革新や導入をもたらすとも考える。そこで、媒体をめぐる矛盾とその解消が、当の媒体が透明になっていくプロセスであり、その過程こそが生産者と受容者における、実践と知識が変化しつつ構造化するあり方なのである。

キーワード：紙芝居、伝承、媒体、矛盾、透明